

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心 会 発行

60年3月現在 会員数
返子地区 162名
葉山地区 294名
大船地区 63名
(合計) (519名)

60年3月号 (152号)
3月発行 者 萃
根岸 編 集
中村 愛 岳

詩吟と詩舞とそして私

長柄支部 舟渡 舟風

「寒中に春近し」…この句はそれぞれの人の人生に想いあたる一言のようで、私などはようやく此の頃になって春を迎えられそうなる生活になりました。

私が詩と云うものを知ったのは、十六、七才の頃でした。それは昭和十四年頃で、当時は隣りの国中国との事変の最中で、誰も男子であれば一度は通らねばならぬ適令の徴兵検査があつて、合格したものは二ヶ年間の厳しい教育を終えて、旧満州や今の中国各地に出征したものでした。

その頃の私などは中学へも行けず、北陸の一漁村で、毎日朝早くから海に行き、地引網を引き、夕方には田畑の手伝いをさせられながら高小を卒業し、函館の北洋漁業の水産会社へ勤めることになりました。そこで最初はお茶汲みをやりながら仕事を覚え、夜は乙種中学に通つて学び、帰つてから又通信教育の書を開くと、まさしく苦学の連続でした。

当時英語は対敵語と云われ、習つても日常は使えませんでした。船中の仕事のためには覚えなければ仕事も出来ず、隠れて

身につけたものでした。それとは逆に漢文は大事にされ、難しい字を書き取りをしては読んで、どうにか綴れるようになった頃の事です。本社である横浜から上司の人がこられて、暫くしてから社内です。吟とは何か知らぬうちに、漢文を見て読んでいました。そのうちにこの漢文に節をつけて詠ずることが詩吟であることを知りました。

その時の上司であつた吟の先生は「月成元氣」と云う人でありましたが、後になつて聞いたところによると、関東でも偉い詩吟の先生だつたらしいのです。今になつて思い出すと、当時「壁に題す」に始まり、「天草洋に泊す」「蒙古来」等教わりました。若い頃の基本は今になつて役立っているように思われます。

その後私も、あの大東亜戦争が始まつた次の年に徴兵検査で甲種合格、関東軍の第一線であるソ満国境の牡丹江省に山砲兵として送られました。厳しい寒気の中で訓練を受け、毎日馬と共に起居すること二ヶ年、この時も不思議な縁で、詩吟と軍歌が兵隊の日課で、たゞ国を守る為に死ぬことだけが、最高の名誉と教えられていました。戦局の悪化と共に、北満から南方の孤島に送られ、玉砕の地サイパン、グアム、沖

繩と参戦、本土も幾度か空襲されているころ、夜間に乗じて沖繩を脱出し、海上に流れいたところを助けられ、一命をとりとめ台湾にゆき、その奥地の洞窟の中で、あの終戦の大詔を知ったのです。当時食するものもなく、草や木の実を食り、芋を作り生きながらえていました。そして時々詩吟や歌を唄っては慰めあい、たゞ故国に帰れる日のみを待ちわびていました。

一年後ついに其の日はきて、浦賀に上陸、唯々友と抱き合って泣くばかりでした。故郷に帰って「戦争とは何であったのだろう、誰のためにこんなに傷ついたのだろう」と過去の悪夢であったかのように振り返り、心の痛手を直すべく、放心したようにさまざま、海に向って泣く毎日でした。

戦後二十年は夢の如く、此の間に幾度か職を替え、子供たちを育てるだけが精いっぱいでした。其の後仕事の都合でこの温暖な葉山へ来て住むことになりました。そして湘南の地に詩吟が普及している事を知り、知人に聞きたゞしたところ、地元の名柄で岳風流を教えているとの事で、早速に尋ねて入門することになりました。

最初は恥ずかしさが先にたち、背中汗をびっしょりかいた想いが懐かしく、先輩の皆さんについてようやく声が出るように

なつた頃、指導して下さった根岸清風先生が他界せられて誠に残念でした。其の後竹石憲岳先生に引継いでいたゞき、今日迄十五、六年間に亘り教鞭を担っていたゞいております。

又其の頃恒例の温習会るとき、図書館ホールに於て、三井雲岳先生の「常盤孤を抱くの図」の詩舞を拝見して、このような立派な舞があることを知り、又華道吟、書道吟など珍らしい吟法が披露され、感慨無量でした。その魅力に取りつかれ、早速に千葉佳香先生の門下に入門させていたゞき、今も毎週、先生の厳しい鞭のもと、精を出して楽しく通っております。

この頃になつてようやく詩と云うものの意味が少し分りかけてきたようで、まさに人情と其の地の風光明眉な景色とが相俟って、人の心を揺がす名詩が生れることを悟れたようです。毎月の「吟道」「神奈川吟道」を拝読して、全国的に普及していることに驚き、更に碩心会の月報に各先生の寸評や支部の先輩の皆様のご感想文を読ませていたゞき、もつともつと勉強せねばと心に念じています。又吟の催しがある度に楽しみに出掛けて、皆様のお顔を覚えたいと思っております。今後ともよろしく御指導下さいますようお願い申し上げます。

◇碩心会新指導者の紹介

2月17日付で左記の方々が準師範を認許されました。

岩崎恵岳 佐久間爽風 松井正山

桜らんまんの

“鎌倉散策のさそい”

鎌倉散策第三回目は「桜咲く史蹟」巡りを計画しました。往時を偲びながら、陽春のひとときを楽しんでみませんか。

(とき)

4月8日(月) 雨天の場合10日(水)

(集合)

国電逗子駅 10時

(主なコース)

逗子駅||久木大池||ハイランド||光触寺||十二所神社(昼食)||大慈寺跡||明王院||浄妙寺||報国寺||杉本寺||上杉禅秀屋敷跡||勝長寿院跡||文覚上人屋敷跡||八幡宮解散(段葛観桜自由)

◇昼食持参・軽装で御参加下さい。

◇参加者は左記へ御一報下さい。

(資料作成部数の関係上)

七五―二五九五 秋元梁岳

七五―一五五〇 中村愛岳

伝号の不動文字について

許証部長 中村 幸岳

日頃の精進の甲斐あって、春の審査に見事合格された皆様おめでとうございます。担当いたしましたして、早速合格者名簿を作成、温習会の席で許証が授与できるようにと、本部に申請の手続きをいそいでおります。

そこで許証の不動文字である「伝号」について、最近入会された皆様にお知らせいたしましょう。

これは、祖宗範木村岳風先生が定められたもので、先生は郷里に聳える、霊峰八ッ岳をこよなく愛し、吟道の修業をこの登山に見たてられたものであります。

まず地下水が、地上に湧き出る生命現象から「泉」をもって初伝とし、一步一步高さを求め、下界を離れた所を中伝に「山」を置き、更に登るにつれ視界千里、俗塵を払う天地の境に到りて奥伝「風」とし、いよいよ高く険しい岩石多く、草木又稀な高地に及んで、皆伝「下位岳」とし、更に精進と努力を重ね、岳風流統の奥儀を極めた門下生に対し「上位岳」を贈って総伝と定められたものである。

先生の「岳・風」の一字をいただくもの、心を新に、岳風流統の研鑽に不断の努力を積んで、後進の指導育成と、斯道の普及奨励に、一層寄与することを誓いましょう。

練吟メモ

○漢字の発音は、本場の中国でも、むかしとはかなり違っているらしいので、ただいまの日本の吟詠界では、漢詩の平仄のことには触れないでいいようである。しかし、漢詩を鑑賞する場合や、漢詩を作ってみようということになると、やはり、平仄は避けて通れない重要な課題であるようだ。

○平仄とは、簡単にいって、漢字のアクセントである、という説明でいいとされている。日本語でよく例にでるのが、箸の「ハ」と、橋の「ハ」で、語尾のあがりさがりが違うことはご承知のとおり。手許の並の漢和辞典でも、「ハ」と発音する漢字は三十五字ほど出ているが、その発音は、当然違っていないはずである。

○これら漢字の同音を区別するために、四通りの発音のあがりさがある。「平声」最近は（ひょうせい）と読んでいる本もあるが、平らに発音する字で、東・冬・江など。次に「上声」は、急に語尾があがる字

で動・奉・紙など。「去声」は、カーブする発音で、送・象・痛など。「入声」は、急に語尾のさがる発音で食・葉・室・析・吉等語尾にフツクキチがつく字である。

○このように、あらゆる字音をこの四種に分け、これを「四声」と称した。そして作詩にあたっては、その中の「平声」と別に、「上・去・入」の三声をあわせ「仄声」と言うが、平字と仄字を適当に組み合わせることにより、詩の調子をなめらかにするようになった。この平の音、仄の音の位置と、押韻とを合わせ規定したのが近代詩であり、唐詩である。

○日本漢詩は、唐詩を規範として約千二百年間その伝統を守り続けて来た。しかし、終戦後の教育の変化に伴い、残念ながら漢詩文の教育は後退した。そして詩文に重要な役割を果たして来た平仄は、その存在価値を失った形となった。（つゞく）

春雑詠

松和支部 菊地 笑山

めぐりあへぬ孤児に祖国の春寒し
島椿紅吐きつゞく流入基地
声のみの雲雀となりて春深む
翔つもののみな春光となる河口
春日傘逢ふときめきを廻しゆく

梅を訪ねて

鎌倉の春いちばんを歩く

さきの晩秋の鎌倉散策に気をよくして、二月十八日、吟友二十名が八幡宮の太鼓橋前に参集、早春の鎌倉路に梅を訪ねました。今回も秋元先生のお骨折りで左記のコースを設定していただきました。

八幡宮神苑ぼたん園(冬ぼたん) 宝戒寺 頼朝墓 白旗神社法華堂跡 大江

広元墓 島津忠久墓 三浦一族墓 荏柄天神 鎌倉宮 護良親王墓 瑞泉寺

鎌倉の古寺には不思議と花がついて回ります。閉静な古寺の片隅に、ひっそりと絵のように咲く梅の花、そして椿、ワビスケ等が可憐な風情を添えてくれる。又浅い春の光のもと、福寿草や露の臺が春にさがかけて芽を出していて、土の匂い、草の匂いにも、春はもうそこまできているように感じられ、春を待ちわびる私達の心をなごませてくれました。(愛岳)

鎌倉さんぽ

石渡 桂風

誰彼となく茶の沸きて牡丹園
頼朝の墓守りも老い春寒し
梅の香に絵馬を連ねて天満宮

街かどで

早春の或る日の午後、街かどの書房に立ち寄った。いつとはなしに、書房の御主人との話が詩吟の事にふれていった。以下はその御主人の話。

それはたしか昭和十一、二年頃だったと思う。用ありで横須賀に行き、三笠会館の前を通ると、詩吟大会があるということで大勢の人が集まっていた。自分も嫌いでなかったもので、何とはなしに会場に入った。

中に入ると木村岳風という先生が、詩吟を始める前に、尊王攘夷派の志士久坂玄瑞の話がされた。それは玄瑞が夕暮の賀茂の河原で詩吟をはじめると、いつの間にか兩岸の弦歌のさよめきが静まりかえり、それほど朗々たる吟声が入を魅了したという。その話のあと木村先生が吟じられたが、その吟声の素晴らしさに感激、今でも忘れられない。正直いって他の人の吟は全然きかれなかった。詩吟には全く無関係な自分だったが、木村岳風という名前と、朗々たるあの吟声、久坂玄瑞の話など、あの時の感激は今でもはっきり覚えているという。
岳風流統下の私は嬉しくなり「書きますわよ」と心いそいそと店を出ました。(愛岳)

(久坂玄瑞)

江戸時代末の尊王攘夷派の志士。長州藩士。吉田松蔭に学び、高杉晋作とともに松下村塾の双壁といわれ、松蔭の妹を妻とした。江戸に出てイギリス公使館焼き打ちに参加、下関の外国船砲撃に加わった。一八六四年、同志と禁門の変をおこしたが、流弾で負傷し、自刃した。

訃報

碩心会の最年長者岩見声風さん(一色A)が二月十三日、八十六才で逝去されました。御冥福を心からお祈りいたします。

(住所変更)

401 和田句泉(新)逗子市沼間一―二―一九

(入会)

678 清水光枝 葉山町一色一六五二

(一色A) (電)〇四六八―七五―二二一九

679 大谷一夫 葉山町一色三四五

(滝の坂) (電)〇四六八―七六―一二二五

680 大橋昭雄 横須賀市追浜町一―四八―

(吟 甫) (電)〇四六八―六五―六八五七

681 藤村 宏 逗子市桜山六一―九―一三

(銀 詠) (電)〇四六八―七一―六六八四

(退 会)

84 岩見声風(一色A)死亡 123 小峰俊風(一色A)

124 加藤清風(一色A) 496 笈川貴子(大船A)

588 金沢一郎(堀内・A) 647 清野正一(逗子A)